

〈資料紹介〉実相院蔵『三十六歌仙画帖』

榎 井 亜 依

一. 書 誌

箱入。箱の表蓋には「明正天皇宸翰／三十六歌仙 画歌壹帖／六百九拾六号」と書かれた題箋が右上に貼られている。表蓋中心には、「本院宸翰 衣裳人形／御細工」と直接書き付けられている。

折本（画帖仕立て）。一帖。縦二四・三センチ、横一九・八センチ。

表紙は後補装と思われ、布表紙で金欄。見返しは鳥の子に金砂子となつている。

前述の寸法の色紙に、縦一六・二センチ、横一五・一センチの鳥の子紙が貼られ、そこに歌仙絵と和歌が書かれている。

墨付き一八丁。箱書きは前述のとおりだが、画帖には外題および内題なし。奥書なし。

明正天皇の宸翰とされる。これを踏まえるならば、書写は江戸時代前期であろう。

二. 翻 刻

【凡例】

一、できるかぎり資料の書写の様態をそのままの形で残すことを目指す。そのため、以下のとおり原則を立てた。

- ① 旧漢字は新漢字に改めることをせず、異体字もできるかぎりそのままに残す。
 - ② 踊り字は、「ゝ」「々」「く」を区別して用いるものとする。
 - ③ 字の大きさは意図的に全て統一した。
 - ④ 虫損などにより判読ができない字は□で示した。
- 一、紙幅の都合上、以下のとおり意図的に体裁を整えた。

① 散らし書きや改行は「」を用いて示した。

② 行が左から右に書かれる左書きの和歌については、行末に「(左書き)」と記した。

【翻刻】

〈表〉

ほの／＼と／赤石の／うらの／朝きりに／しまかく／れゆく／船
をし／所思ふ

左 柿本人丸

「(1オ)

右 紀貫之

さくらちる／木のした／かせはさ／むからて／空に／しられぬ／雪
そふりける

「(1ウ)

左 躬恒

いつくとも／春の／光はわか／なくに／またみよしの、／山は雪ふ
る

「(2オ)

右 伊勢

みわの山／いかに待／みんなふとも／たつぬる／人も／あらしと思
へは

「(2ウ)

左 家持

まきもくのひはら／もいまくも／らねは小松の／はらにあは雪／
そふる

「(3オ)

右 赤人

わかぬ浦にしほ／みちくれは／かたを／なみ／あしへを／さして／
田鶴なきわたる

「(3ウ)

左 在原業平／朝臣

はなにあかぬ／なけきは／いつもせし／かとも／けふのこよひに、
る／時はなし

「(4オ)

右 遍昭

石上ふるの山／へのさくら／花うへけん時／をしるひと／そなき

「(4ウ)

左 素性

見てのみや／人に／かたらむ／さくらはな／手毎におりて／家つと
にせむ

「(5オ)

右 友則

ゆふされは螢より／けにもゆれとも／ひかり／みねはや／人のつれ
なき
「(5ウ)

左 中納言敦忠

あひみての／のちの心に／くらふれは／むかしは／物をおも／はさ
りけり
「(8オ)

左 猿丸太夫

おく山に／もみちふみ／わけなく／しかの／声きくときそ／秋はか
なしき
「(6オ)

右 高光

かくはかり／へかたく／みゆる／世中に／うら山／しくも／すめる
月かけ
「(8ウ)

右 小野小町

わひぬれは／身をうき草の／ねをたえて／さそふ水あらは／いなん
とぞ思ふ
「(6ウ)

左 公忠

行やられて山路／くらしつ／ほど、きす／いまひとこゑの／きかま／
ほしさに
「(9オ)

みしか夜の／更行まゝに／高砂の／みねの松風／ふくかとそきく
(左書き)

左 中納言兼輔

「(7オ)

右 壬生忠峯
有明のつれなく／みえし別より／あかつき／はかりうき／ものはな
し
「(9ウ)

右 中納言／朝忠

あふことの／たえてし／なくは／中くに／人をも／身をも／怨さら
／まし
「(7ウ)

〔裏〕

袖にさへ秋の／ゆふへはしられ／けりきえし／あさ地かつゆ／をか
けつ、(左書き)

左 斎宮女御

「(1オ)

右 頼基

ひとふしに／千世を／こめたる杖なれば／つくともつきし／君かよ
はひは
「(1ウ)

左 藤原清正

あまつかせ／ふけ井のうらに／ゐるたつの／なとか／くもぬにかへ
ら／さるへき
「(4オ)

左 敏行

秋はきの／花さきにけり／たかさこのおのへの鹿は／いまやなくら
ん
「(2オ)

右 順

水の面にてる／月なみを／かそふれば／こよひそ秋の／もなかなり
ける
「(4ウ)

右 重行

夏かりの／玉江のあしを／ふみしたき／むれゐる鳥の／たつ空そな
き
「(2ウ)

左 藤原興風

たれをかも／知人もなし／高砂の／松もむかしの／友ならなくに
「(5オ)

ときはなる／末のみとりも／春くれば／いましほの／色まさりけ
り
「(3オ)

右 清原元輔

ちきりきな／かたみに／袖をしほりつゝ／すゑのまつ山／波こさし
とは
「(5ウ)

左 宗于朝臣

右 信明朝臣

ほの／くと／在明の月の／つき影に／もみち／ふきおろす／山おろ
しのかせ
「(3ウ)

左 是則

みよし野の／山のしらゆき／つもるらし／ふるさと／さむくなりま
さるなり
「(6オ)

右 元真

夏くさはししけりにけりな玉銚の道行人もむすふはかりに

「(6ウ)

深山いて、夜□□/□きつ□/郭公/□□つきかけて/声□□こ
る

「(9オ)

いは、しるよるの契もたえぬへしあくるわひしきかつらきの袖(左書き)

左 小大君

「(7オ)

右 中務
秋風のゆくにつけてもとはぬかなおきの葉ならば音はして
まし

「(9ウ)

右 仲文

思ひしる人にみせはやよもすからわかと夏におきあたる露

「(7ウ)

(二) 箱書き
箱書きには、「明正天皇」の宸翰とある。明正天皇とは、『国史大

辞典』の項に次のようにまとめられている。

千とせまで奈もかきれるけふよりは君にひかれて万代やへ

む(左書き)

「(8オ)

一六二九―四三在位。幼称は女一宮。諱は興子(おきこ)。
後水尾天皇の第二皇女、母は皇后和子(東福門院)。嫡出の第

大中臣能宣朝臣

「(8オ)

一子で、將軍徳川秀忠の外孫にあたる。元和九年(一六三三)

右 忠見

「(8ウ)

十一月十九日誕生。(中略)在位十五年にわたり、その間父上

いつかたになきてゆくらんほと、きすよとのわたりのまた

た夜ふかきに

「(8ウ)

皇が院政をとつたが、寛永二十年十月三日皇弟紹仁親王(後光
明天皇)に譲位。以後仙洞に在ること五十四年にして、元禄九
年(一六九六)十一月十日崩御。七十四歳^①。

左 兼盛

この箱書きを踏まえて成立を考えるならば、実相院蔵本の成立は
この一六三三年から一六九六年の間と推測できるだろう。

(二) 形 態

実相院蔵本をみると、和歌や絵が描かれている和紙の部分に虫食いによる損傷があるが、これを裏打ちで補修した形跡があり、そのうえで水色の色紙に貼っている。完成当初から画帖仕立てであったのか、卷子本や屏風絵のようなものが切断されて現在の画帖仕立てになったのかは推測しかねるが、完成当初のままの状態を保っているのではなく、修繕や装丁の直しを経て現存の状態となったと考えられる。

(三) 書と絵

和歌の書に関しては、少なくとも四つの異なると思われる筆跡が確認できる。したがって複数名の人物によって書がしたためられたことが想定される。また、実相院蔵本が納められている箱の「明正天皇宸翰」という題箋を勘案するならば、複数の筆跡のうちの一つが明正天皇のものとなるかと思われる。また絵については、多少の剥落は見られるものの、彩色が鮮やかに残っている。装束の文様や扇絵も緻密に描かれている。ただし、書と絵については、識者に判断を仰ぎたい。

(四) 歌人の配置

実相院蔵本は、藤原公任撰の歌合形式の歌仙秀歌選『三十六人撰』に取り上げられた歌人についての和歌を所収している。実相院

蔵本では、一丁につき歌人一人が配され、見開きによって左右の歌人を番えた、歌合形式を意識した配列となっている。

絵入りの『三十六歌仙』の現存資料のうち最古といわれる佐竹家旧蔵の『三十六歌仙絵』（以下佐竹本と略す）がある。森嶋氏によると、佐竹本の歌人の配置は「上下二巻の体裁に左右が意図されたのであって、歌仙の姿に左右が示されているのではない」という。実相院蔵本は画帖の見開きに左右の番いが描かれ、歌仙の体はそれぞれ相手方に向かっている構図となっており、佐竹本の趣向とは一致しないことが分かる。一方、趣向が実相院蔵本と近似するものとして、業兼本が挙げられる。これについては、森氏によって次のように説明されている。

然しながらこの歌仙絵に見える左右の形式は、大きく佐竹本などと異なるところであって、左右歌仙の歌を絵の左右に書き分け、また歌仙の姿もその形式に準じて左右相對するが如き形に描かれている。つまりこの形式は、三十六歌仙の左右を十八番の歌合として絵の上に示したものであり、歌仙絵の上に左右の意義を新たに打ち出したものであるが、三十六歌仙の左右は、遺品の示すところこの業兼本に至ってある新しい段階に入ったものと見られる。^③

このように、左右を意識した構成という点では、実相院蔵本は業

兼本の趣向に近い。しかしこれにとどまらず、実相院蔵本には、この見開きの左右の配置についてさらに特徴的な点が挙げられる。実相院蔵本では、左方に配される兼輔、斎宮女御、小大君、能宣の四首の和歌が左書きとなっている。画帖を見開きに開いた状態において、中心に左右の別と作者名を記し、そこから、初句から結句への流れが左右対称になるように和歌が書かれるのである。したがって、左方の和歌の改行が左から右へ行われることになる。

この『三十六歌仙』の左書きについても、すでに森暢氏が指摘されている。森氏によると、この左書きという特徴は一歌人につき二首を挙げる二首本三十六歌仙絵の系統の鎌倉後期の現存資料に確認することができ、室町時代における扁額歌仙絵へと受け継がれていくという^④。

近年では寺島恒世氏によって、二首本系統である俊忠本三十六歌仙絵の考察の中で、次のように述べられている。

図の通り、俊忠本は、『時代不同歌合』と同様に番いごとに
対面する歌合の形式を取り、その左方に属する歌人（猿丸・能宣）は、作者名を左、歌を右、右方歌人（小町・忠見）は作者名を右、歌を左に記し、左方の歌を左書きにして、右方の書きの対称性を強く示している。業兼本に「時代不同歌合絵」を融合させた形の新しいこの本文において、留意されるのは左

書きの登場である。早く森暢氏が指摘されたこの左書きは、管見の及ぶ限り、先例は見出し難く、現在のところ、俊忠本が起源の位置を占めるものと認定される。日本語の表記において通常存しない左書きが、左右の対称性に関わって成立したのは確かであろう^⑤。

この寺島氏の考察を踏まえるならば、実相院蔵本もまた左右の番いを強く意識した形式になっているといえるだろう。もちろん、実相院蔵本は前掲の翻刻のとおりに歌人一首を挙げるものであり、一歌人につき二首を挙げる二首本の系統とは異なる。そのため、実相院蔵本は二首本系統と同系統ではないが、この左右の対称性を意識する形式は俊忠本と同様に特徴的であるといえるだろう。実相院蔵本では、左書きとなっているのは四首であるから、一八の左右の番いのうち、二割を超えてこの形式の対称性をみることができることになる。

さらに、作者名と和歌との配置だけを見るならば、実相院蔵本においては、右方がすべて右側に作者名、その左側に和歌が書かれているのに対して、左方一八首のうち、七首（このうち四首は前掲の左書きのもの）が右側に和歌、左側に作者名が書かれている（左書きのもの以外では、人丸、宗于、興風がこれに該当）。したがって、この七首を含む左右の番いを画帖見開きで見ると、作者名と和歌の

配置は右から順に、左方和歌、左方歌人名、右方歌人名、右方和歌となつてゐる。この形式からは、四割近くが左右の対称性を意識して書かれてゐることがこからうかがえる。

(五) 所収和歌

『新修絵巻物全集』では長谷川信好氏により、代表的な八本の『三十六歌仙』諸本における所収和歌の比較がなされている。^⑥ 本稿でもこれを踏まえ、実相院蔵本の所収和歌を諸本と比較した(末尾【歌表】参照)。そうしたところ、長谷川氏が取り上げた八本の諸本にはなく、実相院蔵本にのみ所収が確認された和歌は三六首中一五首であつた。これに該当するのは、伊勢、家持、業平、遍昭、素性、小野小町、兼輔、斎宮女御、敏行、信明、元輔、元真、仲文、忠見、中務である。さらに調査の結果、この一五首の中で先に触れた藤原公任撰の『三十六人撰』に所収されていない和歌は、一二首にのほることが明らかになつた。つまり、『三十六歌仙』諸本と共通しない所収和歌のうち、そのほとんどが『三十六人撰』以外の、別の歌集から採集されているということになる。

では、その参考となつた歌集とはどのようなものか。この一二首はすべて勅撰集に所収されているような著名なものであるため、様々な歌集に所収されており、特定の歌集との関係性は判断しがたい。ただ、今回の調査を踏まえて述べるならば、この一二首すべて

を所収する歌集は確認できなかったが、最も多かつたのは『俊成三十六人歌合』で一〇首あつた。これに続くのは『時代不同歌合』で九首である。このように歌合形式の歌集を踏まえて選歌した可能性は高い。ただし、小野小町と元真に関しては『俊成三十六人歌合』『時代不同歌合』のどちらにも実相院蔵本の所収和歌に該当するものがない。したがつて選歌にあつたのはこの二つの歌合形式の歌集以外の複数のものも参考にされたことが推測される。『三十六歌仙』諸本自体が多様な選歌の傾向を見せるが、実相院蔵本においても、藤原公任撰の『三十六人撰』の人選には則りつつ、選歌については必ずしもそれにとどまらない独自性を有していると言えるだろう。

四.まとめ

以上、実相院蔵本の翻刻を報告したうえで、その特徴を絵入りの『三十六歌仙』諸本の先行研究に則つて確認してきた。実相院蔵本は、業兼本に端を発し、二首本系統、扁額歌仙絵に継承されていくような、歌合における左右の番いの対称性を強く意識した画面構成となつてゐた。一方、所収和歌については、佐竹本や業兼本をはじめとする諸本とも一五首が異なつており、特定の系統との関わりを見出しがたい。加えて、藤原公任撰『三十六人撰』の人選のなかで、選歌はそれにとどまらないという編纂に対する意識も確認すること

ができた。今回は検討することができなかったが、彩色が鮮やかに残る絵や宸翰とする書についての分析をこれに重ねていくことによつて、さらにその特異性も明らかになると思われる。

以上の報告に当たり、識者からの斧正を賜うことができれば幸いである。

【歌表】

凡例

一、この表は、『新修日本絵巻物全集』第一九巻所収の、長谷川信好氏が作成した「歌表2」（一〇三〜一〇四頁）の諸本の所収和歌比較に実相院蔵本を加えたものである。

一、「歌人」の項目は、実相院蔵本の歌人の配列の順に挙げた。

一、「初句」の項目は、すべてひらがなで記載した。なお、異同があるものの同一の和歌と考えられるものについては、諸本の異同はひとまず問わないものとした。

一、「三十六歌仙諸本」についての調査結果は『新修日本絵巻物全集』に従い、略称は以下のとおりとする。「佐」―佐竹本、「上」―上置本、「業」―業兼本、「後」―後鳥羽院本、「藤」―藤房本、「木」―木筆本、「光」―光廣奥書本、「実」―実相院蔵本。

一、「当該和歌所収和歌」の項目の「三」の欄には、藤原公任『三十六人撰』の所収の有無を示した。他の歌集に所収されている場

合において、他の歌人の歌とされている場合は、その歌人名を記入した。「特記事項」の欄には、『三十六歌仙諸本』の中で実相院蔵本にしかな確認できない和歌について、『三十六人撰』以外のどの歌集に所収されているかを調査し、その結果を掲載した。その際に、他の歌人の和歌として所収されている場合は、歌番号のあとにその歌人名を記入した。なお、この調査には『新編国歌大観』^⑧を用いた。

歌人	初句	三十六歌仙諸本						当該和歌所収和歌集 特記事項
		佐	上	業	後	藤	木	
人丸	ほのほのと たつたがは	○		○	○	○	○	○
貫之	さくらちる むすぶての とふひとも	○		○		○	○	○
躬恒	いづくとも わがやどの すみよしの	○	○		○	○	○	○
伊勢	みわたせば おもひかは さくらがり みわのやま	○		○	○	○	○	○
家持	さをしかの かさ、ぎの	○	○	○	○	○	○	○

